



『ベアトゥス黙示録注解』写本

教 養 図 書 館

手 塚 甫

われわれの図書館を、他の学部図書館のように「教養部図書館」と言わずに、「教養図書館」と言うのには、いささか訳がある。利用者が教養部関係者に限られないから、と言うだけではない。文字通り教養の図書館であることを目指しているからなのである。

いきなり妙な言葉の詮索から始めてしまったが、ここで教養の定義を下そうなどと大それたことを考えているのではない。これまで毎年のように経験することであるが、教養部での授業が始まると間もなく、新入生の口から「何で今更、人文社会系の教科などを勉強しなければならないのか、自分は薬学の、あるいは、獣医学の、水産学の勉強をするために北里に来たのに」という声を耳にするのである。尤も、一般教育、つまり教養課程のあり方は、今日広く問い直されている時でもあり、新入生がこういう疑問を持つのはある意味で当然とも言えるが、そのことを少し考えてみたいだけなのである。

所で、そんな声を聞いて、彼等に進路選択の動機を問糺してみると、殆どは、高校の先生や親に勧められたから、あるいは自分の偏差値に見合うものだから、と答え、肝心の自分の選んだものに対する本人の思いはなかなか聞けない。その点をつくと、殆どの人が「専門」でやって行くうちにその意義も教えてくれると思いこんでいるようである。勿論、中にはしっかり自分の考えをもっている人も毎年少数ながらいることも確かである。だが、多種多様な学問分野の中からこれをやると決めたのは、当然ながら、何も薬学を勉強したからではあるまい。獣医学を学ぶ前に獣医学

を学ぶことを、動機は何であれ、自分なりに決めたのである。だとすれば、やって行くうちにその学問の価値が分るであろうと考えるのは、少し筋道が違っていると言えないであろうか。その同じ人が、三年、四年になり、あるいは卒業してから会う機会があると、決まったように「教養」の頃が懐しい、専門課程では実習、実験に追われ、学問の意義を論じたり、何のためにこの学問を、とかを考える暇もない。「教養」でもっとしっかりそういうことを考え、友人と語り合っておけばよかったとの悔いを口にする。

この点に関しては、実は僕自身苦い経験がある。僕は大学では歴史学を学んだ。歴史を選んだのは、当時、歴史に強い魅力を感じていたからだ。それは父の強い反対を押し切るほどのものであった。尤も、それはまだ漠然としたもので具体性に欠けていた、が、それはいずれ大学の教授の口から何らかの形で教えられるものだと思っていた。この期待は、しかし、みごとに裏切られた。歴史学の価値とか、素晴らしさというものを大学での講義から得ようと思った自分の誤りに気付いたのは、ずっとあとのことであった。何を歴史に求めるかは、人から聞くことなく、自分が決めることだとやっと知ったのである。なんとも情ない話ではあるが。その後しばらくして、僕はマックス・ウェーバーの「職業としての学問」という本を読んだ。その中で、それぞれの学問が「知るに値するかどうかは、これらの学問みずから論証しうべき事柄ではない。」「ある研究の成果が重要であるかどうかは、学問上の手段によっては論証しえな

いからである。それはただ、人々が各自その生活上の究極の立場からその研究の成果がもつ究極の意味を拒否するか、あるいは承認するかによって、解釈されうるだけである」(岩波文庫本43-44頁)という件を見た時は、全く、我が意を得た思いがした。自分が経験的に知ったことが間違いではなかったと分って、うれしかったのだが、同時に、この本をもっと早く読んでいたらあんな遠廻りをしなくて済んだのに、とも思った。

専門分野の学問から学ぶことは、その分野での諸々の知識であって、それは学ぶほどに量的に蓄積されていく。その得たものは、ある程度数量的に示し得る。所が、その知識が如何ほどの価値をもっているかは、その学問自体では証明し得ないのである。同じことが、ある人にとって非常に価値ありと思えても、別の人には全く関心と呼ばない、ということはある。何に価値を見出すかは、各人に任されたことであり、しかも諸々の価値は、どれが上か下かを定めることが出来ないものなのである。その人の最もよしとするものがその人にとって最上の価値を持つというだけのことである。それは数字などでは全く示し得ないのである。

「教養」には、自分とは違った価値観を持つ人が沢山いる。自分が何でもないと見過ごしてしまうものに情熱を傾ける人も少くない。授業、あるいはそれ以外でもいろいろな先生、多くの友人に触れることによって何故彼はそういうものに一生懸命になるのかを聞きながら、自分が気づかなかったものの中にもいろいろな意義のあることを教えられる。それは、しかし、自分が目ざしたものを見捨てることでは全くない。むしろその反対だ。自分が求めるもの、専門課程で学ぼうとするものの意味について、彼らに負けなだけのしっかりした根拠を自分の中に見出すべく、自問自答

することになるのであるから。専門に没入する余りに、自分の専門で得たものを基準にして全てを測ろうとするのは、丁度、自分の立っている所は不動だとし、周囲が自分を中心に動いていると考える天動説的考え方と似ている。いろいろの価値を知ること、自分の持つ価値を見失うことではない。自分の求めるものの価値を、他の多くのものの中に置いて、改めてその意義を確認することである。つまり、ものを相対的に見る目を養うこと、地球も他の多くの天体の中の一つと知った地動説的考え方にも通ずる。それは、人を謙虚にさせると共に自信をも与えてくれるのである。

そういう中で、これから自分が専門課程の学問に求めるものを少しでもしっかりと見極める場が「教養部」なのではないだろうか。

いろいろな授業、先生、友人に触れ、いろいろの価値のあることを知ろう。だが、その中でどれが大事かを決めるのは自分自身である。そう、君が自分で考え、自分で決めるべく思索を深める場所、それこそがわが教養図書館なのである。(教養図書館長)

— 閲覧証の交付 —

教養図書館を利用するには、閲覧証が必要です。新入生の皆さんには、下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りに来て下さい。ただし、医学部は医学図書館で4月24日(水)以降交付します。

この閲覧証は、卒業するまで有効ですので、大切にして下さい。なお、交付までの間は、学生証を使用して下さい。

衛生学部	4月22日(月)
薬学部	4月23日(火)
獣医畜産学部	4月24日(水)
水産学部	4月25日(木)
看護学部	4月26日(金)

発信と受信

出川 一雄

恋仲の男女間に交わされる言葉は素朴であっても、潤いをもって発信され、香りさえも漂わせながら恋人に伝わっていく。まさに、「落花流水の情」というべきである。

発信と受信、それは簡単なようだが、対話、討論、折衝、会議、授業、いずれの場においても表現の正誤、伝達方法の優劣、伝達効果の有無等の複雑な問題が潜んでおり、恋人同士のように、うまく運ばない。

第1に、情報にしても、発信者と受信者の間の方向感覚のズレ、交信のタイミング、カバーする範囲・内容や質の上下により、その全体像が大きく変容する。第2に、発信者・受信者についても、年令差や能力差により発信と受信との間に内容・質・量に著しい誤差が生じてくる。更に、交信の効果に実質的な影響を与えるものは、発信者と受信者の取り組む姿勢であろう。私は、心理学に片鱗の知識をも有しないが、小稿では、この「取り組む姿勢」を取り上げてみたい。さて、卑見によれば、この姿勢には、おおむね6種のタイプ又はその複合型があるようだ。

(1)理想型 これは、プラトンの著書『クリトン』（注）にあるごとく、ソクラテスとその弟子クリトンとの対話にみられる理想的な姿勢である。クリトンは、師の説示を的確に受け止め、疑問があれば積極的に問いかける。ソクラテスもクリトンの言葉を真正面から受け、諄諄と説き諭していく。両者の対話の間に少しの透き間もない。だが、凡人がこの型を維持するには、集中心、積極性そして旺盛な知的好奇心を持続しなければなるまい。

(2)無関心型 これは、万事に無関心で、理由も保障も不在のまま、「なんとかなるさ」、「なるようにしかならない」と思っている安穩なタイプである。発信するにしても、太鼓が叩かれて音を出すように、他人にせがまれて始めて、中味のない寸言を発するだけである。また、受信するときは、「われ関せず」と眠るがごとく受信し、「馬耳東風」と受け流してしまう。発信者のまじめな言葉も、むなしく消え去るのみである。

(3)不平型 この型は、何らかの愚痴をこぼす「ものぐさ」タイプだから、自らの発意で発信するのは泣きごとや不平を並べたいときである。また、他人にせがまれて発信するときは「面倒臭い」を連発するだけで、少しも他人に働きかけようとはしない。また、受信するときは、「厄介なこと」とばかりに半ば拒絶反応を示しながら受信する。これでは、いつまでも有用な情報は身に着かない。

(4)攻撃型 このタイプは「相手不在型」といってもよい。自己の偏狭・独善を省みることなく、激しい自我の下に発信し受信する。ゆえに、発信するときは、さながら「空家^{あきや}で声^か喰^くらす」ごとく、自分の言いたいことだけを言い放って「さようなら」である。また、受信する場合、生来の頑固さから「狂信」を「自信」と勘違いして、他人の発言に耳を傾けようとはしない。したがって、貴重な情報は本人の傍らを素通りしていつてしまう。

(5)防御型 この型は、自分の周囲に「掘り割り」を巡らせて、他人を近付けないし、自分も他人へ近付かない。その理由も多様であ

り、「恥しい」というもの、「口は災いの門」と信じて「沈黙は金なり」を決め込むもの、自分の弱点を寸分も他人に露呈しないよう「恰好をつける」ものなどである。ゆえに、たとえ発信するにしても「当り障り」のないことだけを述べて終りである。反対に受信する場合には、発信者に対し質問はもとより、反応さえも示そうとはしない。

(6)知識偏向型 これは、他人より多く知っていることに無上の喜びをもつ「知ってるよタイプ」である。この型の発信者は、一知半解な知識までを動員し、他人に対し訓示又は誇示するかのようにものを言うので、その発言に重みはなく、他人から失笑や反発さえ買うことがある。また、受信するときは、「知ってるよ」、「分かってるよ」という意識だけが先行し、発信された情報を半熟のまま受信し、その本質までを読み取ろうとはしない。

以上6つのタイプを大まかに通覧してみたが、発信者と受信者の姿勢に、自主性を踏まえた批判精神と相手方に対する参加精神がない限り、実りのある交信ができないことが分る。さて、学生諸君は、どのタイプに属するのだろうか。情報化・国際化時代の今日、変化を感じ取る柔軟な頭脳と、先を読む鋭敏な洞察力を養うため、多くの人と、そして異質の人とも交信の輪を拓げ、大いに自分を磨き上げてほしい。自慢ではないが、かく言う私は、これまで前記6つのタイプをすべて体験してきた。だが、最も肝心なことを言い漏らしているようだ。現在の私は、果たしてどのタイプなのだろうか。照顧脚下。(法学)

(注)

『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫10
プラトン著 久保勉訳 岩波書店 1984

(文 131.3/P71s) 63頁以下。

(6頁より続く)

(追) 私が鉄道に興味を持ったのは、たしか、中学時代だったと思います。大学時代そして北里に勤め始めた頃は、SLを追い掛け写真を取っては、自分で満足し、出来映えを楽しんでおりました。

テントを張ってのSL撮影も出来なくなったこの頃(年による体力衰退?)何か鉄道の歴史について調べて見たいと思い、図書館に足を運んでみました。

教養図書館には約10万冊の蔵書があり、その中から自分の求める書物を捜す楽しみ、見つけ出せない時の苛立ち、そして見つけた時の嬉しさ、図書館には色々なドラマが潜んでいます。

諸君も学生時代に何か一つ自分自身の手で調べてみてはいかがですか。きっと図書館の職員も応援して下さいと思います。

(衛生学部事務長)

参 考 図 書

- | | |
|---------|----------------|
| ・平凡社 | 世界大百科事典 |
| ・小学館 | 日本大百科全書 |
| ・朝日新聞社 | 世界の鉄道 |
| ・実業之日本社 | 世界機関車大系 |
| ・雑誌 | 旅 |
| ・ビデオ | T D K コア 汽車は友達 |
| ・その他 | |

線 路 の 話

(線路はつづくよ、どこまでも…)

佐野 斌 洋

交通機関として、私達の頭に浮かんでくるのは、飛行機・船・鉄道・自動車……等ですが、その代表格で毎日お世話になっているのが鉄道です。

日本における鉄道の歴史は「汽笛一声新橋を……」そう、明治5年(1872年)新橋～横浜間の陸蒸気から始まります。

西欧では蒸気機関の生みの親スティーブンスンの時代まで遡ります。スティーブンスンの第一号蒸気機関車アクティブ号は、1825年ストックトン～ダーリントン鉄道の貨物列車の牽引にあたりました。当時はまだ客車は馬が引いており、蒸気機関は危険視されておりました。蒸気機関が初めて客車を引いたのは、1830年リバプール～マンチェスター鉄道からです。

さて、私達が世界の鉄道で一度は乗ってみたいのはと……尋ねられれば、たぶん皆さんは、あの華麗な国際列車「オリेंट急行」の名をあげられることと思います。

オリेंट急行は、ロンドン～イスタンブール間約3500km(8か国…イギリス・フランス・スイス・イタリー・ユーゴスラビア・ブルガリア・ギリシャ・トルコ)を3泊4日で走破する「西欧」と「東洋」を結ぶ国際列車です。

複数の国々を結ぶ国際列車について、ここで一つの疑問が浮かんでくる。それは、線路(軌道)の巾は各国とも同じなのだろうか。国際列車を走らす以上軌道の巾は各国とも同じでなければならない。それとも、国際列車の為に特別なレールが引かれているのだろうか。

か。(鉄道は軍事上重要な輸送機関である以上、各国共通とは考えられないが)

世界の鉄道の軌道を調べてみると、ソ連を除いて多くの国が巾 1,435cmにだいたい統一されている。(日本では新幹線 1,435cm在来線 1,067cm)では、巾 1,435cmは、何を基準に定められたのだろうか。そのルーツを探てみると、以外にもローマ帝国シーザーの時代まで遡らなければならない。

当時シーザーはイギリス遠征を企て、征服するには最新兵器である戦車を活用するのが最適であると考え(?)多量の戦車をイギリスへ送り込んだ。(当時の戦車……映画ベンハーの戦車競争の場面に登場する馬が引く1人～2人乗りの車)戦争に用いられた戦車はその後、乗り物としてイギリスの街や村を縦横に走り回り、やがて主要道路には、車輪の跡(轍)がはっきりと刻まれていった。

時代は進むにつれ、交通機関も著しく発達していったが、新しい乗り物を考案する際には、乗り心地や安定性を考え常に車輪は刻まれた轍の巾を考慮して製作されていた。

18世紀に入り、イギリスを始めヨーロッパ各国では、鉄道建設が盛んに行われたが、レールを敷くにあたって、轍の巾を基に軌道巾が定められていた。

この轍の巾が、現在世界各国の鉄道標準軌道巾として用いられています。なんと、線路の巾は、ローマ時代の戦車の車輪巾だったのです。

(5頁に続く)

「流れの中で」

安倍希美

今年もまた春がめぐってきました。春は私の大好きな季節です。それは、緑萌え花咲きほころぶ美しい景色の中で、胸ときめかせ輝く顔ばせをした、うらやましいほどに若々しい新入生の皆さんと出会えるから。新入生の皆様、御入学おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

大学ではこれまでとは全く異なった新しい流れが皆さんを待ち受けていることでしょう。今までの生活環境や物の考え方など各人各様でしょうから、北里での流れに対しても魅了されてしまう人、戸惑いを感じる人、ちょっぴりの失望を味わう人など様々いらっしゃるでしょう。しかし、とにかくにも皆さん方は人生における大きな転機の一つを迎えられたわけなのです。

ちょうど一年前のことを思い出します。期待と不安の入り混じった複雑な気持ちで、初めて北里の門をくぐったあの日のことを。そこには今までとは全く逆の流れがほとばしっていました。つい先日まで私は暢気な学生だったのに、いきなり人にものを教える立場とならなければいけない、それも体育専攻とはいえ理屈ばかりをこねまわしてきた私が実技を。その他云々とにかくコペルニクス的転換でした。そしてその流れの中で溺れないようにただもがくだけで精一杯の一年間を送り、書物に親しむということをすっかり忘れてしまっていました。

こんな私も、学生時代までは夢みがちな文学少女の一人でした。それこそ寝食を忘れ歩

きながらも本を読み続けたものでした。そんな中で心にしみ入る感動の文章に出会うことができました。それは、予備校に通っていた秋、試験の期日と残された勉強とに追いたたられ、言しようのない切迫感を味わっていた時に、ふと目を通した国語のテキストに載っていた文章でした。大原富枝氏の『婉という女』の一部分でした。

“——その朝、わたくしたち姉妹は、その音をたよりに歩いていった。それは幼い日からわたくしたちを捉えていた不思議な音で、風の音とも松籟ともちがう。流れの音だと教えられていた。

その遠く近くささやくような、時に吠えるようなその音は、幼い囚われ人のわたくしたちに絶えず憧れを誘った。いま赦るされてその音に向かって歩いてゆく。わたくしの胸は微かにときめいていた。主のない番士小舎もひっそりと、谷間は素枯れはじめた草紅葉に朝つゆがしとどであった。

草原を横ぎり、小松のある丘を下ってゆくと、ごうごうとただならぬ音がわたくしたちを押し包むように迫ってきて、三人は怯えた瞳を見合わせ、手を取りあった。そこで草丘は断崖になって、川がその下を流れている。流れはそこで瀬をなして白い布を懸けたように墜ち、泡立ち、獣の咆哮のようなざわめきはそのあたりから立ちこめてくる。

朝日はわたくしたち姉妹の背後から草丘のはざまを裂いて、流れの半ばから向こう岸にかけて照っていた。日向と陰とでは、川は全

く別の生きものに見えた。日向の流れは珠を砕いたようにきらめき、碧や黄や紅に泡立ってこの世のものならず美しく玄妙であった。

わたくしたちは短い叫び声をあげ、言葉もなくこの妖しくも美しいものの姿に魅せられていた。——この寸時^{とどま}も定まった形を持たず、一刻も停滞^{とどま}することのないものの姿を、私はかつて想像することができなかった。”

この時は前後の脈絡がわからないため、うまく内容を把握できない部分もありましたが、神々しい程の美しさと力強さを備えた川と後光に照らし出されたような周囲一帯の風景とが眼前に迫ってくるようで、私も思わず心の中で叫び声をあげたのでした。そしてその時の自分の小ささを痛感させられ、思わず目頭が熱くなったことが今でも忘れられません。

全文を読む機会を得たのは大学二年の時でした。主人公婉の父は土佐二十四万石の執政でしたが、失脚急逝し、その追罰として一家は婉が四才の時より人里離れた一軒家に幽閉され、男の兄弟が獄死し、婉ら女性が四十年ぶりに赦免されるというそれはすさまじい物語だったのでした。先程の文章は、四十を過ぎて初めて外の情景に触れた時の婉の感動を記したものでした。刻々と様を変える川の流れに、婉は自分の人生を投影したのでしょう。獄中にあっても兄から教育を受けていた婉は、自分のいる流れを冷静に見極める惻隠さと、艱難辛苦の連続でありながらも、赦免後二十年以上も生き続ける生命力を持っていました。

私達はややもすると流れに流されてしまいがちになります。けれども自己を見失うことなく、心の奥底に感じる力を忘れることなく、心の奥底に感じる力を忘れることなく、婉のように強^{したた}かに、粘り強く生きてゆきたいものです。（体育）

〈参考文献〉

『婉という女』大原富枝著 講談社 1971
(913.6 /0 27)

図書館利用案内

図書館に入館したら、持ち物を持ったまままっすぐ階段をあがって下さい。2階部分が、新刊書中心の一般図書を併設した閲覧室になっています。この階には、図書館の蔵書のうち比較的利用の多い自然科学系の図書を含め、最近受け入れた図書（過去約10年分にさかのぼって）が全分野にわたって配架されています。階段を上って右側のコーナーには、講義用参考文献・ゼミ指定図書・業績・文庫本・新書・小原文庫があり、南側にはキャレルを配し、北側にはグループ学習が可能な閲覧席があります。この階にない図書は、地階の電動書架で探して下さい。

なお、貸出・返却・予約・複写の手続きは、1階のメインカウンターで受け付けます。

わからない事、疑問を感じたときには、どうぞし尋ねて下さい。

2階のサブ・カウンター上の投書箱も、大いに利用して下さい。また、読みたい本がありましたら、購入希望票が図書館内に常備されていますので、利用して下さい。随時受け付けています。

第7回 「なんじゃもんじゃの会」だより

さる、平成2年12月13日（木）午後5時から7時まで、教養図書館主催の「なんじゃもんじゃの会」が、図書館3階研修室で開催されました。

10月16日（火）に開催された、事務本部相模原分室の久木留毅氏の「レスリングよもやまの話」の続きです。

前回参加者の強い要望により開催されたpartⅡでは、久木留氏の練習・試合風景のビデオを中心に、彼の生い立ち、現在の心境、そして将来の夢と魅力ある話術で、2時間があっという間に過ぎてしまいました。

レスリングが美しいスポーツだと、再認識された方も多かったのではないのでしょうか。

当日参加された方の感想を、いくつか紹介します。

「やはり、最後に楽しかったと言えるスポ

ーツにはげみたいと思った。」（1F男子）

「久木留さん自身の考え方というのが、僕に似ていた。うれしい。時には、自分で考え方をもちというのは、悲しくもなってくるときがくると思う。それをレスリングから自分の考えというものを確立していると思った。本当に勉強になった。」（1I男子）

「これから自分が、ブチあたる物を知らされた。」（2C男子）

「情熱あふれる講師で、すばらしかった。参加学生を見て、こういう会に出席する学生達が、また、北里の良き伝統を創ってゆくのだらうと感じた。」（職員）

教養図書館では、これからいろいろな企画を考えて、親しみやすい「なんじゃもんじゃの会」を開催したいと思っています。

皆さんの意見や希望をお聞かせ下さい。



□ 表紙解説

西村月満

多くの科学者は地球はもうだめだと考えている、というのは本当だろうか。進化の頂点に君臨すると考えられた人間は、実のところ、神が地球という実験にピリオドを打つためにおくりこんだ墮天使だったのだろうか。

歴史的蜃気楼として、合理主義者がしりぞけてきた末法思想や黙示録の終末のヴィジョンが、今、きわめて現実的なものに感じられる。

中世の人々は、1033年にキリスト受難後千年の終末の恐怖をやりすごした時、人間の理性による自己抑制と謙遜が人間を善に到る道にひきもどした、と考えた。さらに、平和への誓いと浄めのための行いが悪の力を敗退させ、神の怒りを鎮め、人類は神と新しい契約を結ぶことができた、と考えた。至福千年の転換期を「歴史」に記したラウル・グラベールは、「人間は自らを靈的に高めることに成功しなければ、一切のもののうちで最も悲惨なものとなる。」と書き残している。

しかし、我々はどうだろうか。今世紀末にあらわれた地球環境破壊等の多くの危機をのりこえ、十一世紀の人々のように「空は笑み、明るくなり、順風によって活気づく」のを見ることができるのだろうか。

表紙の写本さし絵は、十世紀から十一世紀にかけてイベリア半島に広く流布した「ベアトゥス黙示録注解」写本のうち、スペイン、

バルセローナ近くのジローナ大聖堂保蔵のものである。ヨハネ黙示録第8章、第四の天使がラッパを吹き鳴らすと、太陽と月と星の三分の一が打たれ暗くなり、一羽の鷺が中空を飛び、「禍^{わざわい}なるかな、禍なるかな、地に住む人々は、禍なるかな。」と叫ぶ場面である。

黙示録の図解にふさわしく、形態は抽象化され、色彩には象徴的意味がこめられている。例えば、太陽と月の三分の一・ラッパ・鷺に共通する灰褐色がかかった紫は、日食・月食の色であると同時に、地獄の劫火の煙の色である。又、中段の地の硫黄の色は災禍を暗示し、下段の地の赤は樹々や草を焼きつくす炎の色である。（草木の焼き払われることは終末の時代の兆候の一つであると黙示録が教えているとすると、現在炎と消えていくアマゾンの熱帯雨林のことが思い起こされる。）

この写本は、イスラムの支配におびやかされていた中世のイベリア半島のキリスト教徒が、イスラムの紋様表現をたくみにとり入れながら、独特の象徴主義的様式として展開したモサラベ美術の代表作の一つである。

（英語学）

参考『大系世界の美術 10

初期ヨーロッパ美術』学研

図版 125

（禁帯出708 / Ta22 / 10）

閲覧ニュース63号

1991.4発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手塚 甫

電話（0427）78-8005